

大渡小に県内1号

大渡小に開設された
内初のこぼの教室
任に扱ってきたの
、岩手のこぼを語
会会長で、親の会顧

問の菊池義勝さん(78)
―盛岡市―だ。当時、
釜石市立八雲小教諭だ
った菊池さんは、東北
大に1年間、内地留学
して言語障害児の指導
を学んだ。

ピンポン玉を吹く訓
練や、鏡を見ながら舌
先を動かす練習…。子
どもと向き合い、話す
力を高めるための学習
に地道に取り組んだ。
67年11月には、障害を
克服した児童2人が初
めて教室を退級。親や
大勢の来賓の前で立派

に教科書を朗読する子
どもたちの姿に胸を熱
くした。その後、9年
間、大渡小のこぼの
教室を担任。76年から
は盛岡市立下橋中で難
聴の中学生のための教
室を9年間、担当した。

指導の傍ら、通級児
童の声を録音したデモ
テープを持って、親の
会初代事務局長で第2
代会長の成田廣邦さん
と県内市町村を訪問。
手弁当でこぼ・き
こえの教室の必要性を
説いて回る、この活動
が、現在の礎となる。

釜石市に続き、盛岡
市や旧水沢市、宮古市

などにも親の会支部が
誕生し、教室設置運動
を展開。盛岡市立桜城
小に県内2番目とな
る、こぼの教室が開
設されたのは69年4月
のことだ。70年代から
80年代にかけて水沢、
宮古、久慈、北上など
核となる市に教室が開

設され、さらに、周辺
地域へと教室が増えて
いった。

「特殊教育」から「特
別支援教育」へ教育の
在り方が変化する中
で、親の会の名称も2
003年6月に「県」
とほを育む親の会」に
変更。13年には県内全
市町村への教室設置が
実現した。

「教室の担任と親が
面輪となり、教育委員
会の担当者も巻き込ん
だ運動があったから」
と、今がある」と菊池
さん。「誰もが、いつで
も、どこでも適切な教
育を」と訴え続けた成
果が実を結んだ。

中、12市町にとどまる。
課題の早期発見、早期
指導が子どもの成長に
好影響を与えるのは明
らかだが、指導体制の
位置付けや、指導者の
身分保障が明確でな
く、教室開設は自治体
の自主性に任ざれてい
るのが現状だ。

親の会は現在、県内
に28支部。ただ、少子
化や市町村合併の影響
もあり、全ての親の会
支部が活発に活動して
いるとは言い難い。背
景には、メンバーの代
替わりや共働き世帯の
増加などがある。時代
にあった活動の在り方
求め、模索が続く。

佐々木会長(64)は
「コミュニケーション
に課題を抱える子ども
にとって、なくてはな
らない教育。親にとつ
ても、最も身近で相談
しやすい場であるはず。
子どもを真ん中に、
親と先生がしっかりと
手を携え、進んでいけ
るような信頼関係を築
いていかなければいけ
ない」と力を込めた。

同会は、結成50周年
記念大会(白澤弘泰実
行委員長)を6月13日、
盛岡市の県民会館中ホ
ールで開く。パネル討
論などを通して50年の
歩みを振り返り、子ど
も、親、地域の願いに
応える活動の在り方を
考える。桜美林大学心
理学研究所の山口創専
任教授が「子どもの脳
は肌にある」と題して
講演する。

新たな課題も浮上

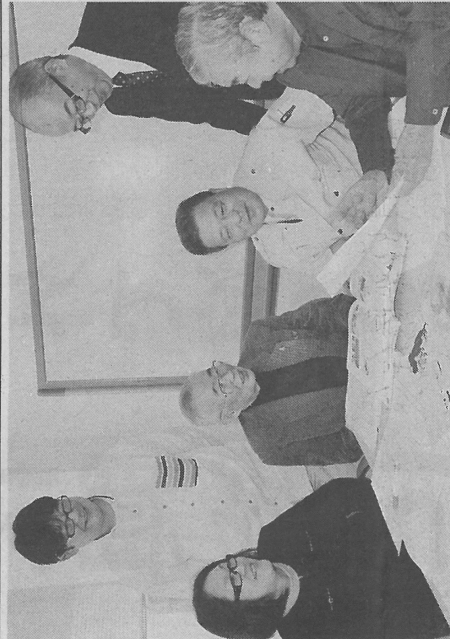
親の会結成、教室開
設から半世紀の時が流
れ、子どもや親を取り
巻く環境も大きく変化
している。発音時は、
口蓋裂や難聴といった
先天性の障害による言
語障害が、指導の多く
を占めていたが、現在、
ニーズが目立つのは発
達障害や学習障害のあ
る子どもたちだ。

人の気持ちや察しに
くい、じつと座ってい
るのが苦手、空気を読
み取る力が弱いなど
子どもたちが抱える困
難さ、その程度も、
一人ひと異なる。コ
ミュニケーションの原
点となる言葉に、課題
が関連して表れること
が多く「こぼの教室」

が子どもの教育ニーズ
や親の悩みに応える窓
口的な役割を果たして
いるという。

指導も、発音や発音
を整えるための個別の
機能訓練だけでなく、
コミュニケーション能
力を高めるためのグル
ープ学習などを積極的
に活用。仲間との会話
や共同作業を楽しみな
がら力を伸ばしてい
る。一方で教員が身に
付けなければならない
専門性も広がり、十分
な教員の数や研修機会
の確保が大きな課題
だ。

また、就学前の「幼
児教室」の設置を求め
る声が強いが、開設さ
れているのは38市町村



50年の歩みを振り返りながら、記念大会の準備を進める「親の会」のメンバー。左から3人目が菊池義勝さん、4人目が佐々木信孝会長